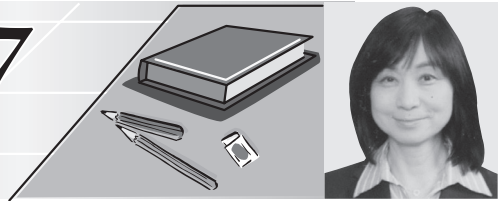


学生時代と図書館 107

「活字の向こうに広がる世界」

辻美也子



■幼いころの出会い

小さい頃、本が大好きでした。生まれて初めて買ってもらった本は、ディズニーの「101匹ワンちゃん大行進」の絵本。その鮮やかな色彩に幼い心はくぎ付けになりました。さらに、その映画では、絵本を上回る映像の鮮やかさと、絵本では静止していたキャラクターたちの動き回る姿にびっくり仰天。大きな刺激を受けて帰ってきました。その後、絵本を買ってもらったたびに、そのキャラクターたちが映画のように動き回るのを想像しながら楽しんでいました。

■「彼」のおかげ

そんな私も、中学生になると読書から少し遠ざかったのですが、高校生になって付き合い始めた「彼」が、年間300冊以上は読むという本の虫で、次々に本を貸してくれたおかげで、私はあっという間に本好き少女に引き戻されました。さらに、図書委員だったその彼の影響で、私も図書委員に手を挙げました。仕事は、毎日の貸出業務に加え、蔵書管理も任されていて、初めて薄暗い書庫に入った時には、普通の図書館では出会えないような様々な本に出会えるワクワク感で非常に興奮していました。図書館は私にとって、新しい世界への秘密のドアのようなところでした。そんな図書館と近くなるきっかけを作ってくれた「彼」に大感謝です。

■活字と映像

本を読む醍醐味の一つは、文字を読みながら、場所や風景、登場人物の顔、しぐさなどを自分で想像して映像にすることにあると思います。大学に入ってから図書館通いをしていた私は、専門書だけでなく小説や随筆もたくさん読んでいました。活字で表現されていることに自分なりの解釈を加え、それを頭の中で映像化していく作業が、自分だけの世界を作り上げているようで、私には大きな楽しみだったのです。

さて、そんな私が当初選んだ職業は、高校の

英語教員。教えている生徒たちに常に伝えていたのは「単語を覚えるときには、その単語の映像や表す内容のイメージを思い浮かべなさい」ということでした。例えば、flowerという単語を覚えるなら、「花」という日本語の文字・訳だけでなく、花の映像を思い浮かべて覚えるということです。そうすることで、限定された文字・訳に拘ることなく、イメージとして幅広く意味内容を解釈できるようになるからなのです。活字を頭の中で映像化するという作業は、読書体験があれば、そう難しくないと思っていました。

■リスニングと映像化

ところが、最近の学生たちと話をしていると、英文を読んで内容を解釈するのに、まず英語の単語を知っている日本語の単語に置き換え、とりあえずその日本語の単語をつないでいくだけというのです。ということは、内容を解釈するのに、映像は全く関わってこないのです。

さらに、音声情報でも同じ手順のようで、特に、リスニングが不得意だと訴える学生ほど「出てきた単語を全部覚えきれないので、内容がわからない。」と言います。そういう学生に「本は読んでも？」と尋ねると、必要な教科書等以外はまず読まない、という答えが返ってきます。読書体験がさほどないため、活字を映像化するのが容易ではなく、ましてどんどん流れては消えていく音声情報を即座に映像化するのは、至難の業なのでしょう。

今更遅いかもしれませんが、学生たちには、本を読んで映像を思い浮かべなさい、リスニングの時も映像化しなさい、と伝えていますが、さて、どれほどの効果があることか……。

活字の向こうに広がる映像の世界、それを彼・彼女らは知らないだなんて、本当にもったいない話だとつくづく思うのです。

つじ みやこ(専任講師 英語教育学、社会言語学)